

気象研究ノート特集『70年代の気象学のあり方』

読後雑感

廣 田 勇*

先般手許に標記気研ノートが送附され、興味深く拝読した。60余編の原稿を集め編集・発行された気研ノート編集委員会の労を多とするにやぶさかではないが、原稿の分類を著者の所属機関別にす以外に、内容別に見直すのもこの特集号の持つひとつの意味があるのではなからうか。以下、全く私個人の見解に基く内容分類を頻度の多い順に並べ、『気象学における70年代の展望』なるものが如何なる形態を取って気象学会員の意見に現われているか概観しつつ、いささかの私見を加えてみようと思う。もし以下の表現にノート執筆者各位に対し失礼に過ぎるところがあれば、それは私の不徳の至すところとして御容赦を乞いたい。

A. 有能技術者型

まず最も多いのがこのタイプである。そこでは従来の自己の仕事（業務）に対する実績と能力の裏付けに基き、今後の仕事を着実に発展させようという自信と抱負がはっきり伺え、頼もしく感じられる。従って記述内容は個々の仕事（業務）に関する極めて具体的なものであり、所謂「体制」を論じたりはしていないがその姿勢自体が無言の意志表示になっている。

B. 気象庁白書型

Aタイプに一見似て非なるものにこの白書型がある。そこに取り上げられている気象庁（地方も含めて）の気象業務、管理運営等に関する問題提起それ自体は、確かに一考に値するものを含んではいるが、Aタイプと根本的に異なるのは主体性或いは自己主張が全く無いことである。必然的に記述は抽象的になり、つまりは「誰が如何

にやるか」という議論に欠けている。従って人々を（自己も含め）動かすだけの力は感ぜられない。

C. 研究発想型

このタイプの発想は本質的に個人個人の研究それ自体に由来している。従って記述は一人称的であり自己主張がある。まず特定のテーマを取り上げ、従来自らが行ってきた研究の経験（或いは実績）に立脚し、今後やろうとする内容・方法・態度がはっきり打出され、然る後にそれに附随する諸々の要素、たとえば予算とか設備とか組織とか、がその研究のためにはかくあるべしという形を取って現れる。当然説得力に富む。

D. 民主々義型

次い多いのがこのタイプで、これは戦後の民主々義教育があまりにも敷衍され誤用された結果の一形態と考えられる。『これこれの問題を皆で一語に考え、力を合せてやっといこうではありませんか』という例の新制中学校自治会的発想である。面白いことに、このタイプには、戦後に教育を受けた若い世代のみならず、それに理解を示した(?)親の世代も含まれている。「民主的」であらんとする余り、提起される問題自体が万人向きにアレンジされ平均化され魅力にとぼしい。学問に於ける連体責任とは（技術でもそうだが）個人の無能力無責任を隠蔽するかくれみのに過ぎない。

E. 観念的体制批判型

世に言うサンパゼンガクレンと同様に、おおむねこのタイプはまず歴史的事情から説き起し、自己の実績・能力にかかわりなく、常に体制批判をもって自己の存在を支えている。Dタイプと異なり分派的なのもサンパなみである。彼等にとって『ビジョン』とは観念的な言葉と

* National Center for Atmospheric Research, Boulder, Colo. U.S.A.

1971年4月24日受理

してのみ意味があるのかも知れない。

F. 重要問題追従型

大気汚染、公害等の「社会問題」を研究者として黙って傍観しては居られない、というまことに「良心的」な態度の人々である。だが10年と言はずもの2、3年も経て別のところから別の問題が出て来たときに、またぞろ鞍替えしてその新しい「重要性」を叫ぶのではないだろうか。すべからず研究の流行に対しては完全に in phase か若しくは out of phase なるをもって良しとし、90度程度の位相の遅れがもっとも良くないと私は思うのだが。しかしEタイプとちがいに角自分で何かをやっているだけ立派である。

無用の誤解を避けるために一言申し添えれば、この気研ノート掲載の論文60余編がすべて上記のタイプ分類に属する訳ではさらさらなく、筆者の批評外の立派な内容

を持ったものも少なからず見受けられるし、一方かく言う私自身の駄文などは、さしずめ「一匹狼遠吠型」とでも名付けて論外にされて結構である。

ところで上に述べたいくつかの分類の他にもうひとつ忘れてはならないものに『不言実行型』がある。但しこれは、当然のことながら気研ノートには一編も見当らない。現在の気象学会員が二千余人、原稿執筆者がその僅か3%であることを考えると、上に述べた統計(?)が母集団の有意なサンプルでないおそれは多分にある。結論めいたことを述べるのが本文の主旨ではないが、この声なき97%のうちの多くの人々が、立場や環境、経験や知識の差こそさまざまであれ、上記A型或いはC型に近い態度で各々の仕事に励むことが、気象学発展のための唯一の道ではないか、と私は考えている。そしてその責任は、如何なる仕事をするにせよ、すべて個人個人に帰着されるべきものである。

昭和46年度日本気象学会奨励金受領候補者募集

昭和45年度より、研究費、研究環境に恵まれない会員の研究を奨励するために、日本気象学会奨励金制度が設けられ、年間に10万円の総額を2件の受領者に贈与することになっています。本年度の受領を希望する会員、あるいは他の会員を受領者として推薦しようとする会員は、申請についての要綱にもとづき、下記の形式で応募あるいは推薦して下さい。

昭和46年6月25日 日本気象学会理事長

締切 昭和46年8月15日 送付先必着

送付先 〒100 東京都千代田区大手町1-3-4

日本気象学会奨励金選考委員会

用紙 B5版横書き

記入事項

1. 受領候補者氏名(ふりがな付)印

生年月日、勤務先および地位 連絡先(郵便宛先、郵便番号および電話番号)

2. 研究題目

3. 研究経過概要と今後の研究計画(400字詰原稿用紙4枚以内)。印刷報告、学会発表のあるものは、題目、雑誌名、巻号頁年、あるいは題目、学会名、年月を記入し、又別刷、図表、写真等の参考資料があれば添付する。資料は原則として返却しない。

4. 受領候補者略歴

推薦の場合は、推薦者氏名、印、勤務先および地位、連絡先(郵便宛先、郵便番号および電話番号)

注) 共同研究の場合は1件として連名で記入する。

奨励金申請についての要綱

1. 気象学、気象技術の進歩に貢献し得る将来性、発展性のある研究はすべて本奨励金の対象となる。完成度の高い研究であることは必要条件ではない。

2. 大学あるいは研究機関に勤務し、経常あるいは特別研究費の配分を受けて気象学の研究に従事する会員は原則として、対象者から除外される。

3. 受領者の選定は、奨励金受領者選定規定(天気17巻8号398頁)にしたがって、理事長の委嘱する5名の選考委員によって行なわれ、今年度の贈呈は10月5～8日札幌市で開催される秋季大会において行なわれる予定(受領者又は代理者が出席可能な場合)。

4. 受領者は奨励金受領後1ヵ年以内に簡潔な研究報告を理事長に提出する。

なお、本奨励金について質問は下記へ問合せ下さい。

〒338 浦和市下大久保255 埼玉大学理工学部

北川信一郎 電話 0488-32-2111